

## 金森修『動物に魂はあるのか』

稲田 祐 貴

### はじめに

金森修『動物に魂はあるのか』(以下、本書と略記する)によれば<sup>1)</sup>、アリストテレスは、動物が靈魂をもつということは議論の対象にもならないほどに当然の前提であると考えていたようである。靈魂は、何ものかが存在する場合その最もそれらしい存在の仕方ですという意味で実体であり、可能的にしかないものが何らかの意味で現実化したという意味で現実態である。さらに、靈魂を形相、始動因、目的因だとも考えていた。このことから、Aという生物がいる場合、靈魂とは、AをAたらしめている本質的なもの(実体)、それが全体として現実化したもの(現実態)、Aの運動がそこから来るところのもの(始動因)、Aがそのために存在するところのもの(目的因)、AがまさにそれゆえにAであるところのもの(形相因)である。

また、彼が提示した靈魂の三相論は、〈動物靈魂論〉の準拠枠となる重要なものである。アリストテレスは、生物の靈魂を三つに分類している。

#### 《アリストテレスの靈魂三相論》

- ①栄養的靈魂—植物。栄養や滋養能力に関係。
- ②感覚的靈魂—動物。感覚を司り表象や欲求と関係。
- ③思考的靈魂—人間。理性、合理性などに関係。

以上のようなアリストテレスの思想を基点にして、数々の西洋思想史における動物論が紹介されていく。そして本書終章の冒頭、デカルト派の〈動物機械論〉はこの靈魂三相論に則って最終的に次のように位置づけられることになる。

デカルト自身の発想に多少とも単純化を加えたデカルト派の〈動物機械論〉は、アリストテレスの靈魂三相論の最初の二つを無化するほどの極端さで、人間精神の独自性を守ろうとした。人間を特別視し、固有視するために、周囲に無数にいる動物たちをただの機械装置としてみて、生命も魂も完全に抜き去るということ<sup>2)</sup>。

このようなデカルト派の〈動物機械論〉に、「常識派」と筆者が呼ぶ〈動物靈魂論〉が対置する。マルブランシュが妊娠中の犬を蹴っ飛ばした逸話に代表されるような〈動物機械論者〉たちは、動物を生きのまま解剖し、その叫び声や流れ出る血に目を向けようとはしない。これに対して、ブリエやヴォルテールらに代表される〈動物靈魂論〉の思想は、〈動物靈魂論〉が〈動物機械論〉へと変貌して近代性へと突進しようとしていくヨーロッパの中で、より古くからある普通の人間の直観や同胞への情愛を表現したものであった。著者は次のように言う。

では、ちょうど十七世紀、十八世紀にデカルト派の〈動物機械論〉への対抗軸設定のために〈動物靈魂論〉が立ち上げられたように、〈現代化された動物機械論〉の勃興と興隆を前にして、われわれは何らかの形で〈現代の動物靈魂論〉を造ることはできないのだろうか。〈現代の動物靈魂論者〉として生きることは適わないのか<sup>3)</sup>。

著者は、〈現代の動物機械論〉に対して、〈現代の動物靈魂論〉、とりわけ常識を生かしたその必要性を訴える。ごく普通の人間として、命に対する普通の直観を大切にしながら、〈現代の動物靈魂論者〉として生きること、時に退嬰的な態度をとりつつそれなりの公共性の自覚と直観が付随するように生きること、これが筆者の立場である。

さて、この著者の問題意識と提案をふまえた上で、さらに本書を引き延ばすために、本書評においては、終章のなかで「分流の一つ」として言及される、〈靈魂の物質性〉の滴定とも言える作業を少しばかり行おうと考えている<sup>4)</sup>。具体的に取り上げるのは初期ストア派の靈魂論である。本書では取り上げられていない哲学者たちを扱うことで〈動物靈魂論者〉の多様性を示し、その区分けを行いたい。

その前に、〈靈魂の物質性〉の流れにあるガッサンディについて少し触れておこう。同じ〈靈魂の物質

性)を訴えた人物でも、初期ストア派とガッサンディではかなり趣が違うので参考になると思われる。ガッサンディは、魂は形相のような非物質的なものでも、関係や調和のような静態的なものではなく、むしろ極めて能動的なものであり、動物の場合にはそれが即、運動原理になるようなものだと考えた。ガッサンディとその紹介者ベルニエは、魂を火になぞらえて、体熱の自明性、栄養や血液を油などの燃焼可能な物質にみたてることでその証拠としている。また、ガッサンディは〈動物機械論〉への反発も行っている。デカルト風に動物を機械だと強弁し続けるなら、他人をも機械とみていってしまい、自分だけが感情と認識を持つと見なすようになると主張している。〈動物機械論〉は〈自〉ではなく〈他〉を単純化し貶下する眼差しを内包させており、その〈他〉のカテゴリーにはいずれ人間自身も含まれてしまうだろうという指摘である。ただ、この主張は動物が人間と同じくらい理性的だと言いたいわけではなく、動物と人間に出發する原理、それぞれを構成する必然性の違いを認めてはいる。

## 1. 初期ストア派の靈魂論

初期ストア派とは、前3世紀ころ活躍した創始者ゼノン、クレアンテス、クリュシッポスらのことを指す。彼らの直接の文献はほとんど残っておらず、その思想の手がかりは後世の人々が引用したものに頼るほかない。ここでは、アルニムによって編纂された『初期ストア派断片集』<sup>9)</sup>を参照する。

初期ストア派における靈魂論の特徴は、靈魂を物体(物質)であると考えたことにある。まず物体と非物体の区分を述べておく。物体とは、存在するものすべてのことであり、非物体とは、どんな作用を与えることも受けることもない。彼らは物体に影響を与えるものはすなわち物体であり、非物体的なものは絶対に物体に影響を与えない<sup>10)</sup>と考えている。この区分に従えば、人や動物の原因である靈魂はすなわち物体ということになる。

いかなる非物体的なものも物体の変化に影響されないし、物体も非物体的なものに影響されない。ところが魂は、身体が病気になったり切られたりするとき影響を受けるし、身体も魂が恥じると赤くなり、魂が恐れると青ざめる。そ

れゆえ魂は物体である<sup>7)</sup>。

クリュシッポスはこう主張する。死とは魂の身体からの分離である。しかるに、いかなる非物体も物体から分離することはない。非物体は物体に触れることもないのだから。しかるに魂は物体[身体]に触れてもいるし、分離もする。それゆえ魂は物体である<sup>8)</sup>。

ここで重要になってくるのは、それぞれの原因となるものの用語の区別である。初期ストア派において、生物と無生物などの区別は積極的には行われない。それぞれ物体は保持力、生育力、靈魂のいずれかあるいは複数を持っている。石や木片は保持力だけで一体性を保っているといわれ、自らのうちに動きの原因をもっているものは生育力あるいは靈魂をもっていると考えられた。したがって、端的な例でいえば、ストア派に言わせれば泉や磁石も生育力あるいは靈魂をもっている、ということになる。

自らのうちに動の原因をもっているのは、動物と植物、まとめて言えば生育力と魂によって維持されているかぎりのものであって、そのうちには金属も含まれると彼らは主張する。それらに加えて火もまた自ら動くものであり、おそらくは泉もまたそうである<sup>9)</sup>。

そして、保持力、生育力、靈魂を維持しているのは「氣息」だと考えた。物体=原因を氣息の一元論で捉えたこと、これがラ・メトリらの物質論との違い、消去法的な靈魂物質論というよりは、その物質性を積極的に認めていくような物質論、いわば〈強化主義的/積極的な靈魂物質論〉の要諦だと思われるが、これについては第三章で触れることにして、次章では初期ストア派の動物論に注目したい。

## 2. 初期ストア派の動物論

動物とはなにかについて、アリストテレスの靈魂論に従ってストア派の言説をみていこう。初期ストア派の人々は、あまり植物に関心を示さなかったといえる。「植物に言及されるのはたいていの場合、動物と並べて共通性が示されるときか、動物と対比される場合かのいずれか」<sup>10)</sup>である。数少ない断片から察

するに、彼らは、アリストテレスの靈魂三相論でいうところの①と②に大きな切れ目を入れ、植物には魂がなく、動物や人間にはあると考えたと思われる。その代わり、三相論でいうところの栄養的靈魂の部分に生育力があてられている。「植物はすべて生育力によって支配されており、動物はすべて生育力と同時に魂によって支配」<sup>11)</sup>されており、植物と動物との違いは、むしろ表象と衝動の有無に帰着する。

動物は、表象と衝動という二つの点で、動物ならぬものよりも優れている。表象は、外のものが感覚を通じてやって来て、知性に衝撃を与えることによって成立する。衝動のほうは、表象の兄弟分であって、知性の緊張的な力に基づいて成立する。知性は、感覚を通じてこの力を伸ばすことによって対象に触れ、対象に向かって進み、それに達して把握することを熱望している<sup>12)</sup>。

ここから、初期ストア派の人たちは動物に感覚や若干の知性のようなものを見ていたことが分かる。それでは、物体である靈魂はどのようなものであると考えられたのか。

ストア派は「魂が」八つの部分からできていると主張する。すなわち、まず五つの感覚をつかさどる部分—視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の部分と、六つ目に音声「言語」をつかさどる部分、七つ目に生殖部分、八つ面にほかならぬ主導的部分からなるのである。この主導的部分から、それらすべての部分が、タコの触手と似た仕方で固有の器官を通して伸びている<sup>13)</sup>。

「主導的部分」と呼ばれるところに、人間に固有とされるロゴスもあるとされているものの、主導的部分の部位は心臓であるとも考えられたことから、人間だけが主導的部分を持っているとはいえない。また、主導的部分はもちろん、魂を維持しているのは氣息であるとも考えられた。「魂の推理思考的部分、それは主導的部分と言う固有の名前でも呼ばれているのだが、これもまた心臓のうちにある」<sup>14)</sup>。

ただ、彼らの動物論・生命論においてこうした植物／動物／人間といった区別、アリストテレスの三

相論に則った区別はさして重要ではない。重要なのは、一貫して、無生物と生物、植物と動物にまたがる段階的な差異は、一個の人間のうちにみられる差異と同等のものと考えたということである。アリストテレスの三相論の枠組みでは捉えがたい思想である。彼らは保持力も生育力も靈魂も、実質は氣息であると考え、無生物にせよ、動物にせよ、植物や無生物にせよ、氣息によって維持されているとみなしたのである。彼らはその連続性を執拗に強調している。

古人によれば、氣息には二通りあって、魂的なものと自然的なものであるが、ストア派は保持的な氣息を三番目のものとして導入して、それを保持力と呼んだ。／「生き物に」生まれついている氣息は二通りの種類があって、それは生育的なものと魂的なものである。また三番目に保持的な氣息を導入する人々がいる。石をまとめて保持しているのは保持的な氣息であるが、動植物を養っているのは生育的な氣息であり、動物をして感覚できるものとし、あらゆる動を動かすることができるものとしているところの、魂をもつものにおける氣息は魂的なものである<sup>15)</sup>。

人間がもつ知性も、ロゴスを欠いたものたちとの共通点をもつという。肝要かつ本章の要約にもなる断片を引用する。

知性は…多くの力をもっている。すなわち、まとめて保持する力、育成する「自然的」力、魂的な力、ロゴス的な力、思考の力、その他、類においても種においても無数の力をもっている。そのうち、保持力は、石や木片といった、無生物にも共通で、われわれのうちにあって石に似ている骨もまた、それを分けもっている。また生育力は、植物にまで行きわたっていて、われわれの中にも、爪や髪といった、植物に似たものがある。この生育力になるともう、動を有した保持力となっている。それに対して魂は、表象と衝動をあわせもった生育力である。これはロゴスを欠いた動物たちにも共通にあって、われわれの知性もロゴスなき動物の魂に類比的なものをいくらかもっている<sup>16)</sup>。

また、これらをかかえこんでいる宇宙も氣息を原理として動いている。魂である氣息が宇宙全体に行き渡っていることで、全ての一体性が保障されているという考え方である。

宇宙全体の物体は氣息を共有して一緒に流れているのに対して、熱はあとからつけ加わったものでもなく生き物の生成以後のものでもなくて、まさしく第一の最初に生まれた生まれつきのものであると考える。そして自然と魂はまさにそのものにほかならず、したがって、それが自己自身を動かす、つねに動く実体であると考えて間違いないことになる<sup>17)</sup>。

### 3. 初期ストア派の位置づけ

以上のような特質をもつ初期ストア派の靈魂論、動物論を、本書の議論のなかに位置づけようと思う。プラトンやアリストテレスとの相違、ヴォルテールやラ・メトリとの相違について考察する。

プラトン、アリストテレスとの比較。アリストテレスとの共通点は、彼らも生物の観察を重要視した点をひとまずあげることができるが、ここでは異なる点をいくつか強調したい。差異点は次のようになる。①そもそも靈魂を三相にわけようような区分から距離を取り、その連続性を強調したこと。②ガッサンディと同じようなアリストテレスの靈魂論の否定、魂は形相のような非物質的なものでも、関係や調和のような静態的なものでもなく、能動的なものであると考えたこと。また、ブレイエは、③ストア派に、アリストテレスやプラトンのような万人に妥当するような一般性を追求するような原因論<sup>18)</sup>とは異なる、個々の存在者に結びつけられるような原因論<sup>19)</sup>を構想していたこと。

ヴォルテールらの靈魂論との差異について。ヴォルテールらは、アリストテレスらと異なり、靈魂の物質性を認めていたという点で初期ストア派と似ている。ヴォルテール、ラ・メトリ、ガッサンディ、初期ストア派は〈靈魂物質論者〉としてまとめることが可能である。その靈魂論は本書において、次のように書かれている。

ヴォルテールもラ・メトリも「人間が靈魂をもつ」ということはつまり、人間があれこれと

いう〈有機化された物質〉、または体制や臓物を持ち、それが順調に働いているという以外のことではないという考え方を表明していた。これはほとんど消去主義的な靈魂論であり、概念装置に微妙な変更を加えれば、驚くほどに現代的な発想だといっていいこともない<sup>20)</sup>。

本書のラ・メトリを解説した部分から引用すれば、それは「靈魂がいわば若干身体化され、臓物化される」<sup>21)</sup>ような靈魂物質論である。そのような彼らを〈消去主義的な靈魂物質論者〉と呼ぶとすれば、初期ストア派は〈強化主義的な靈魂物質論者〉と言える。ラ・メトリらも初期ストア派も、ともに、動物と人間の区別のあやうさを指摘した。前者は靈魂を身体の側にまで落とし込むことで（人間の地位を〈動物機械論者〉が提唱した特権的地位から格下げすることで）、後者は靈魂を原因かつ物体と捉え、それは動くものに共通していることを示すことで（動物その他の地位を格上げすることで）。

### まとめ

以上、初期ストア派の動物論をめぐってその内容を確認し、その特徴をアリストテレスやラ・メトリらとの差異をみた。本書で取り上げられた哲学者とのさらなる比較、とりわけ、ガッサンディ＝ベルニエのエピキュロス主義的な靈魂物質論者との違いや、靈魂を非物質と考えながらも、「動物と人間との間の違いを明確な〈断絶〉というよりは、多少の差異と類似を混ぜ合わせた〈程度の違い〉とみた作業」<sup>22)</sup>との比較（キュロー・ド・ラ・シャンプルら）もできるが、ここまでにして、これまでの議論を強引にまとめると次のような区分けが可能である。

〈動物機械論〉	〈動物靈魂論〉 〈消去主義的 靈魂物質論〉	〈動物靈魂論〉 〈強化主義的 靈魂物質論〉
マルブランシュ ベルナル (デカルト)	ヴォルテール ラ・メトリ	ガッサンディ <sup>23)</sup> ベルニエ 初期ストア派
〈現代化された 動物機械論〉	〈現代の動物 靈魂論〉 常識派	〈現代の動物 靈魂論〉 非常識派

## 【文献表】

- アリストテレス (1968) 『靈魂論』『アリストテレス全集』第六卷、山本光雄訳、岩波書店。
- 金森修 (2012) 『動物に魂はあるのか』中公新書。
- スピノザ (1951) 『エチカ (上) / (下)』畠中尚志訳、岩波文庫。
- ブラン (1959) 『ストア哲学』有田潤訳、白水社。
- ブレイエ (2006) 『初期ストア哲学における非物的なもの論』江川隆男訳、月曜社。
- ※初期ストア派についての引用については、以下のものを参照した。
- ゼノン他 (2000) 『初期ストア派断片集1』中川純男訳、京都大学学術出版会。
- クリュシッポス (2002) 『初期ストア派断片集2』水落健治ほか訳、京都大学学術研究会。
- クリュシッポス (2002) 『初期ストア派断片集3』山口義久訳、京都大学学術出版会。
- それぞれ『断片集1』、『断片集2』、『断片集3』と略記する。

## 注

- 1) 金森2012, pp.16-26。
- 2) 金森2012, p.219。
- 3) 金森2012, pp.239-240。
- 4) 金森2012, pp.227-228から少し長い引用する。  
「〈動物機械論〉への対抗軸的言説設定としての〈動物靈魂論〉以外に、微妙に異なる方向性と分節様式をもった議論をした論者たちが併記されていたことに気づくはずである。その人たちは靈魂そのものの存在位相について、より焦点化した立論をした。例えばガッサンディ、ベルニエ、ヴォルテール、オフレー・ド・ラ・メトリのような人たちだ。私がこの〈動物靈魂〉概念史の文脈で彼らにも触れたのは、〈動物靈魂〉が〈人間靈魂〉の非物質性に比べてより物質的だとする判断に基づく。読者は覚えておられると思うが、ガッサンディやベルニエは、少なくともその企図上は靈魂を物質的方向へと近づけようとするために、エピキュロスに依りながら〈火・靈魂〉論を立ち上げた。私は、その唯物論的傾向が〈火〉という物質でもあり非物質でもありそうなイメージによって支えられていることに一種の混乱因子を見て取ったが、それは或る意味、私の私的解釈にす

ぎない。また、ヴォルテールもラ・メトリも「人間が靈魂をもつ」ということはつまり、人間があれこれという〈有機化された物質〉、または体制や臓物をもち、それが順調に働いているという以外のことではないという考え方を表明していた。これはほとんど消去主義的な靈魂論であり、概念装置に微妙な変更を加えれば、驚くほどに現代的な発想だといえていえないこともない。いずれにしろこの〈靈魂の物質性〉の滴定という作業は、〈動物靈魂論〉そのものと交叉はしながらも、他方向に展開していく主題であり、本書では二次的にほめかすという程度の言及しかできなかった。それは本書の分流の一つなのだ。」

- 5) 初期ストア派についての引用については、以下のものを参照した。ゼノン他(2000)『初期ストア派断片集1』中川純男訳、京都大学学術出版会。クリュシッポス(2002)『初期ストア派断片集2』水落健治ほか訳、京都大学学術研究会。クリュシッポス(2002)『初期ストア派断片集3』山口義久訳、京都大学学術出版会。(それぞれ『断片集1』、『断片集2』、『断片集3』と略記。)
- 6) 初期ストア派における非物的なものはクレトン(言葉の意味)、空虚、場所、時間の四つが示されている。(セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁集』、『断片集2』p.447)
- 7) ネメシオス『人間本性について』、『断片集1』p.312。
- 8) ネメシオス『人間の自然本性について』、『断片集3』p.132。
- 9) オリゲネス『原理について』第三卷、『断片集3』p.289。
- 10) 山口義久「解説」、『断片集3』p.463。
- 11) ガレノス『ヒッポクラテス「箴言」へのユリアノスの反論に対する書』、『断片集3』p.101。
- 12) フィロン『モーセ五書の寓意』、『断片集3』p.156。
- 13) ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』、『断片集3』pp.148-149。
- 14) アプロディシアスのアレクサンドロス『魂について』、『断片集3』pp.153-154。
- 15) ガレノス『入門、医師たること』、『断片集3』p.100。
- 16) フィロン『モーセ五書の寓意』、『断片集2』p.528。
- 17) ガレノス『震え、動悸、痙攣、悪寒について』、『断片集2』p.521。
- 18) 「プラトンやアリストテレスにとって問題は、存在者における恒久的なもの、安定したもの、つまり概念による思考に確固たる支点を与えようのようなものを説明することだった。したがって、原因も、それが〈イデア〉であれ、不動の動者であれ、やはり幾何学的概念のように

恒久的である」(ブレイエ2006, p.13)。

- 19) 次のような断片も残っている。直線の定義に「引っ張る」という動作が出てきており興味深い。「ストア派は、もろもろの点の間の隔たりが形を作るのと同様に、緊張が形を与えろと言う。彼らが直線を極限まで引っばられた線と定義するのもそのためである。」(シンプリキオス『アリストテレス「カテゴリー論」注解』、『断片集2』第二卷p.527)。
- 20) 金森2012, p.228。

21) 金森2012, p.154。

22) 金森2012, p.224。

23) さらに細かく見ていけば、冒頭でも触れた通り、ガッサンディがよりどころとしたエピキュロスらの主張はストア派のものとは異なり、両者を同じ区分の中に入れることは困難に思われる。しかし本発表で議論できた範囲では〈強化主義的靈魂物質論〉のなかに入れるほかない。